北九州歴史文化遺産　第六十六回

小倉到津球場の記憶。かつてベーブ・ルースで沸き、製門戦等で華やいだ

この地に小倉到津球場が存在し、戦前、プロ野球選手らが活躍したことを示す JR 九州設置の記念碑

北九州市小倉北区中心街に近い到津。この地にかつて野球場が存在。ベーブ・ルースも出場してホームランを放つ日米野球が行われていた。１９３４年（昭和９年）、ほぼ90年前の出来事で驚かれる読者が多いだろう。かつ門司鉄道と八幡製鉄の野球、いわゆる製門戦が一時代を築いていた。それらの事案を含め、この到津球場の歴史、意義を改めて見直したい。

小倉北区上到津３丁目、洋服のはるやまの店舗脇に高さ90㎝ほどの三角錐が立つ。かつてこの地にあった小倉到津球場跡の記念碑で、この地に社員宿舎を持っていたＪＲ九州が１９８９年（平成元年）に設置したもの。球場は１９２３年（大正12年）に当時の鉄道省（現国鉄）門司鉄道局の施設として完成、野球部のホームグラウンドとして使われていた。陸上競技場も兼ねており、外野は右翼が１２５ｍ、左翼が85ｍと長い長方形。１９２５年秋から、門司鉄道局野球部と八幡製鐵所野球部との試合が行われるようになり、１９２７年からは定期戦となり「製門戦」として地元の名物となったという。

日米野球が行われ、ベーブルースがファンを魅了

この球場で１９３４年（昭和９年）11月26日、日米野球の第15戦が行われ、８―１で全米チームが勝利した。その７回裏、ベーブ・ルースが１２５ｍの右翼スタンドを超えるホームランを放った記録が残っている。当日は雨天だったが、彼は本塁打を予告しての一打でファンを魅了したといわれる。三角錐の記念碑には、その折のベーブ・ルースの写真（毎日新聞社提供）、全米、全日本チームの選手15人の名も施されている。

当日、球場は１万５０００人の観客で埋め尽くされた。全九州から野球ファンが殺到したのである。試合前練習ではベーブ・ルースは観客から借りた笠を手に一塁守備に就いたり、ゲーリックが新聞記者から借りたゴム長靴でグラウンドに出たりと旺盛なサービス精神を見せたという。

国内のプロ野球の試合も計16試合が行われた

国内のプロ野球試合としては、公式戦は行われなかったものの１９３６年（昭和11年）６月14日、大阪タイガース対東京セネタース戦を皮切りに計16試合が行われた。同年７月25、26日には東京巨人軍対大阪タイガースの２試合が、また１９４０年９月にも巨人対タイガース戦が組まれ、ファンを沸かせた。だが、１９４１年（昭和16年）３月28日の阪神軍対阪急軍戦を最後に、第２次世界大戦突入で打ち切られ、球場も大戦中に廃止された。

球場廃止後、跡地は国鉄（後ＪＲ九州）の到津宿舎になり、そのＪＲが後、記念碑を設置。宿舎は廃止され、現在はショッピングセンターなどが立っている。

１９７６年（昭和51年）に小倉から同所に転居して16年間居住し、現在は八幡東区で介護施設の手伝いをしているというＪＲ西日本元社員・藤井勝昭（まさあき）さん（82）は「入居当時、地域の高齢者から、かつて日米野球大会で大変な盛り上がりだったと聞かされた。多分、知らない人が多いと思う。できれば今の人にも知ってもらい、将来に伝えていって欲しい」と話す。

米国、いや世界の球界を代表する選手が市民、若者に熱と希望を注いだ地、小倉到津球場。その意義は今も消えない。

シニアスタッフ　村田和夫

北九州歴史文化塾
講演会

入山20年の歩みと発見

長圓寺から見た小倉の歴史

2025年3月28日（金）

10:00～11:30 <開場9:30>

会場	小倉城庭園研修室 （小倉北区城内1-2）
参加費	会員1,500円 一般2,000円 （資料代含む）
定員	20名（事前予約制）
申込期限	3月24日（月）

講師　吉水 友晃氏
浄土宗長圓寺住職

プロフィール

華岳山西蓮院長圓寺は、嘉吉元年（1441年）に寂誉霊海上人によって開かれた浄土宗の寺院です。もとは小倉城内にありましたが、慶長年間に細川忠興公の命で現在の地（小倉北区鋳物師町）へ移転。その際、細川氏から多くの宝物を賜りましたが、今では持仏の阿弥陀如来立像を残すのみです。

小倉の歴史と深く結びつき、現住職が市民との交流を通じて語る「歴史のこぼれ話」は、地域の知られざる魅力を伝えています。